宗教新聞

発行所 宗教新聞社
東京都新宿区新宿5-13-2
〒160-0022
電話 03-3353-2940(代)
FAX 03-5363-5182
郵便振替口座 00130-9-22704
URL http://www.religion-news.net
©宗教新聞社 2024

購読料（税込）
1部 500円
半年 3,000円（〒共）
年間 6,000円（〒共）

〈社是〉
一、精神革命の旗手
一、宗教連合の具現
一、地上天国の建設

建国記念の日奉祝中央式典

日本を「義」の国に

明治神宮会館

令和6年皇紀2684年の「建国記念の日奉祝中央式典」が2月11日、日本の建国を祝う会（大原康男会長）の主催により、東京都渋谷区の明治神宮会館で開催された。式典には約500名の参加者の他、特命全権大使を含む28か国の在日外交団も参列。式典に続き新保祐司・都留文科大学名誉教授が記念講演。表参道では神輿と首都圏の大学ブラスバンド・子供鼓笛隊が元気に奉祝パレードし、沿道の人たちを楽しませた。

栗田勤副会長の開会の辞で第一部・奉祝中央式典が始まり、国旗を通して橿原神宮に遥拝。国歌斉唱の後、主催者を代表して大原康男会長が挨拶した。

「皇位の安定的継承と憲法の早期改正をはじめ国民の英知を結集して解決しなければならない問題が山積している。現下の国情に真向い、誘導していくことを互いに誓おう」と述べ、政府主催の奉祝式典が行われるよう要望した。

来賓の井上信治・自民党幹事長代理は「政府与党は能登半島地震の被災者が平穏な生活を取り戻せるよう、復旧復興に取り組んでいく。憲法改正は全国で国民世論を喚起し、国会発議に向け力を尽くす」と、駐日外交団を代表してサンマリノ共和国のマンリオ・カデロ特命全権大使は「日本は美しい国で、神道の哲学から日常生活に必要な多くを学ぶことができる」と祝辞を述べた。岸田文雄首相は「『建国記念の日』が、我が国の歩みを振り返りつつ先人の努力に感謝し、さらなる日本の繁栄を希求する機会となることを切に希望する」とのメッセージを寄せた。

祝電披露の後、東京外国語大学1年の別府寛法氏が決議を朗読し、満場の拍手で採択され、大原会長から自民党の井上幹事長代理へ決議文が手渡された。紀元節の歌の斉唱、百地章日本大学名誉教授による聖寿万歳の唱、小柳志乃夫理事が「今こそ古事記に書かれた建国の精神を取り戻そう」と閉会の辞を述べた。

次いで、奉祝パレードコンテストの表彰式が行われ、優勝校・国学院大学と準優勝校・東海大学に大原会長から賞状が授与され、両校による演奏が行われた。

第二部は新保裕司氏の記念講演「美の日本と義の日本」で、要旨は次の通り。

「美」と「義」をあえて対立的にとらえ、「改元を期に日本を義の国へ」という主張を平成31年（令和元年）年頭にした。それから5年経ち、「義」の意義への共感が深まっているように思える。戦後の平和の中で「美」を愛玩してきたうかつさに気付いたのだ。

川端康成はノーベル文学賞受賞の後、「美しい日本の私」という記念講演をした。日本の歴史では「美」と「義」の時代が繰り返されている。奈良時代は「義」で平安時代は「美」、鎌倉時代から南北朝にかけては「義」、室町時代は「美」、戦国時代は「義」、安土桃山から江戸時代は「美」、そして明治時代は「義」、大正時代は「美」、昭和の戦前は「義」、戦後と平成は「美」の時代と言える。

戦後は戦前の反動もあって「美」の時代で、その風潮は平成に流れ込んだ。しかし、それでは過酷な世界に対応できない。だから、令和の日本は「義」の国にならなければならない。

主催者挨拶をする大原康男会長

奉祝記念講演を行う新保裕司・都留文科大学名誉教授＝2月11日、東京都渋谷区の明治神宮会館

祝辞を述べる井上信治・自民党幹事長代理

祝辞を述べるサンマリノ共和国のマンリオ・カデロ特命全権大使

社説

心的外傷後成長（PTG）と宗教

能登半島地震の被災地・輪島市に神戸から駆け付け、炊き出しを行った神戸国際支縁機構の岩村義雄代表が語る、被災者への傾聴ボランティアの必要性は、宗教者の社会活動に大きな示唆を与えている。

PTSD（心的外傷後ストレス障害）は、強い精神的なトラウマ体験によって生じるストレス症状だが、それと対照的な現象がPTG（心的外傷後成長）で、辛い体験で強いストレスを受けた後に人として成長すること。米国の心理学者により1990年代に提唱された。

自分を物語ること

PTGを実証した一人が、ユダヤ人強制収容所に収監された体験をもとに『夜と霧』を書き、精神障害を克服する心理療法を提唱したオーストリアの精神科医ビクトール・フランクルだろう。イギリスのチャーチル首相は、若い頃、南アフリカのボーア戦争で捕虜になった体験からうつ病を患うようになったが、苦しみながらも国民を率いてドイツとの戦いに勝利し、英雄となった。

団塊世代が後期高齢者の仲間入りをし、多死社会になった日本では、死を見据えてどう生きるかが問われている。戦後教育を受け、特定の宗教を信じる割合は少ないが、死を意識して絶望的にならない人が多いのは、死を思うことが逆説的に成長をもたらすことを体験的、文化的に知っているからではないか。これもPTGの一つである。

傾聴が被災者のストレスを成長へと転換させるきっかけになることは、東日本大震災の被災地でも見られた。寄り添う支援者に心の内を語ると、それは自然にその人のライフストーリーに発展していく。研究者によると、ライフストーリーを語る効果は、①トラウマ前・中・後の間に連続性を生み修復する、②起こったことの意味を見いだす助けとなる、③失ったものを悲しみ、記憶に残す機会を与えてくれる、という。

そして自分について物語ることにより、①私には立ち直る力があり、②助け合う人がいて、③新しい道が開ける、という「力」「関係性」「世界観」の発展につながる。それが人としての成長をもたらすのであろう。

人は自分の物語を語ることで、過去と現在を再構築し、それを通して自分を理解し、周りの人たちとの関係性を修復し、トラウマの悪影響を減らし、最終的に人生の意味を発見し、それを表現することで、新しい自分を形成していくのである。つまり、自己形成とは自分が主人公の物語の創作なので、時と環境に応じて編集し直すことができる。それだけの可塑性が人間の脳にはある。

被災者がトラウマから立ち直っていくプロセスで、自己支援者になることの効果がよく語られる。少しずつ余力が出てくると、人を助ける側になるほうが、よほど自分にとっての励みになるからだ。それが人間の本性の一つなので、人類は幾多の困難を乗り越えられてきたのだろう。

岩村義雄氏の「人間だけでなく動物、植物、鉱物に対して注ぐのも隣人愛」との言葉は重要で、自然環境とのかかわりも人の成長にとって欠かせない。最澄が、衆生はみな生まれながらにして仏となりうる素質（仏性）をもつとして「一切衆生悉有仏性」を唱え、天台宗では「涅槃経」に基づく「草木国土悉皆成仏」が強調されたように、日本人は自然とともに成仏する、涅槃の世界に入るとの信仰を培ってきた。それは、宗教心が薄れたとされる現代人の死生観にも反映されている。

死とは自分を生み出した大宇宙に帰ることと考えれば、多くの宗教の説く来世観と矛盾しない。要は物語として心に馴染むかどうかである。死を思うことで人は思考を深め、そこから宗教も科学も生まれてきた。心と体、観念と現実のように、弁証法的に相互作用しながら、一人ひとりの世界像を構築してきたのである。その意味で、災害は自然とのかかわりを考え直す機会でもあり、東北で会った津波の被災者が、「それでも海を恨む気持ちにはなれない」と言った言葉が忘れられない。

日本の未来のために

少子高齢化を先取りしたような被災地の復興には、日本の未来がかかっている。豊かな自然環境の中で、人と人とが深く結ばれたまちづくりが目標になろう。そのために全国民がどう支援していくかが、これからの国のありようを決めることになる。

災害ボランティアをはじめふるさと納税や観光など、いろいろな支援のメニューもそろっている。それぞれが可能な範囲で能登の復興にかかわることが、個人にとっても国にとっても大きな意味を持つように思う。

東大寺二月堂のお水取り

新春に若水で邪気払う

奈良市

「お水取り」として知られる奈良市・東大寺二月堂の「修二会」が3月1日から2週間厳修され、夜は二月堂の舞台に「お松明」の炎が燃えさかる。修二会は「練行衆」と呼ばれる僧侶たちが、国の安寧を願い修行する奈良時代からの行事で、今年で1273回目。

燃えながら二月堂に登る「上堂の松明」は、堂にこもる練行衆の足元を照らす炎。1日午後7時ごろ、重さ約40キロ、長さ約6メートルのお松明を「童子」と呼ばれる世話役が担いで先導し、練行衆10人が入堂した。お松明が二月堂の舞台に上がると大勢の参拝者は炎を見上げ、童子は燃えさかるお松明を担いで舞台の端から端まで走り、舞台から突き出し、回転させ、無病息災をもたらす火の粉を浴びせる。

二月堂の本尊は「大観音」「小観音」と呼ばれる二体の絶対秘仏の十一面観音像で、練行衆も見られない。二月堂の修二会の正式名称は「十一面悔過法要（けかほうよう）」で、本尊に対する悔過・懺悔は、自己の修行から国の救済と利益（りやく）につながる大乗仏教の考えに基づく。浄行する僧侶を選び、心身を清め、本尊に対して礼拝行を行い、1日6回本尊の周囲を巡り、礼拝する行を毎日繰り返す。

十一面悔過法は古密教に神道、修験道、民間習俗や外来諸宗教の作法を今に伝えている。練行衆が2月28日に宿所に入る際には、咒師（じゅし）が神道式に「大中臣祓詞」を黙誦して御幣で練行衆を清める。

3月1日の深夜1時からは「授戒」の儀。和上が食堂の賓頭盧尊者（びんずるそんじゃ）に自誓自戒した後、練行衆全員に八斎戒（殺生、盗みなど）を読み聞かせ「よく保つや否や」と問いかけると、衆は「よく保つ、よく保つ、よく保つ」と誓う。受戒が終わると、練行衆は「ただいま上堂」のかけ声と共に二月堂に上る。

悔過法要が始まると、初夜では「神名帳」が読誦され、全国1万3700余所の神名が読み上げ呼び寄せられる（勧請）。3月5日と12日には過去帳が読誦される。東大寺に縁のあった人々の名前が列挙され、「大伽藍本願聖武皇帝、聖武皇大后宮光明皇后、行基菩薩」に始まり、孝謙天皇と続き、「不比等右大臣、諸兄左大臣」、鑑真は「伝戒根本大唐鑑真和尚」。変わったところでは、鎌倉時代の法要中に名前を読み飛ばされたのを怨んで出てきた女性の幽霊が、源頼朝の少し後に「青衣女人（しょうえのにょにん）」と読み上げられる。

「咒師作法」は、咒師が須弥壇の周りを回りながら、清めの水（洒水）を撒いて印を結び呪文を唱える密教的な儀式で梵語も使われる。「達陀（だったん）の行法」では、兜のような「達陀帽」をかぶった練行衆が道場を清め、松明を持った「火天」が、洒水器を持った「水天」とともに須弥壇の周りを回り、飛び跳ねながら松明を何度も礼堂に突き出す。板に体を打ち付ける「五体投地」も行われる。

観音様に供える「お香水」をくみ上げる「お水取り」は13日午前1時半ごろ、後夜の五体投地を中断して行われる。咒師童子が蓮松明を抱え、南側の石段を下って閼伽井屋（あかいや）に入り、香水を桶にくむ。香水は二月堂に運ばれ、須弥壇下の香水壺に蓄えられる。新春に若水で邪気を払う若水信仰が基盤にあるという。東大寺修二会は752年に始められて以来、一度も途絶えず、「不退の行法」とされている。

二月堂の舞台からお松明の火の粉が降り注ぐ＝3月1日

灯

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。…光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。…しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」（ヨハネによる福音書3：16―17、19、21）

西方キリスト教世界では、今年の復活祭を3月31日に控えて悔い改めの40日期間を過ごしている。創造主なる神の人類に対する恩寵を受け入れることができなかった過ちを痛悔するというのだ。神と人とに対する罪によって闇に沈む世に愛と希望の光を放つ方。蔑まれ罵られても愛をもって赦し抱こうとする救い主が遣わされたと福音は伝える。復活祭の夜、大きな一本のロウソクに火がともり生命のよみがえりを示す。その火は集うものたち一人ひとりに受け渡されて広がっていく。（T）

この発想は内村鑑三の大正12年の講演「美と義」からで、彼は「文明人種が要求するものは美と義で、いずれかを選ぶかによって、国民、文明の性質が異なる。古代ギリシャは『美』を追求したが、ユダヤは『義』を嘉った。日本は、『美』を愛する点ではギリシャに似ているが、『義』を愛する意味ではユダヤ的である」と言う。また「本当の『美』は『義』のある所にのみ栄える」とも言っている。

日本を導くキーワードは「美」ではなく「義」で、「義」が入った本当の「美」にしなければならない。

天地

3月3日、高松のホールでヘンデルのオラトリオ「メサイア」を妻と聴いた。日本ではクリスマスの、ヨーロッパでは復活祭のころに上演されるのが普通だが、胃がんのため62歳で昇天したソプラノ歌手で国立音楽大学教授の佐竹由美（なおみ）さんの三回忌に合わせたもの。高松市生まれの彼女は、東京藝大声楽科を首席で卒業し、内外で活躍していた▼高松市立第一高校時代、恩師竹内肇氏の勧めでピアノ科から声楽科に転向し昭和52年、プリマドンナとしてNHK全国音楽コンクールと全日本合唱コンクールの二大会を制覇した。竹内氏は「ビロードの上を珠がコロコロと転がるような声で、びっくりした」と語っている。天地子も竹内氏に市民合唱の指導を受けたのが縁▼「メサイア」はメシアの預言と誕生、受難と復活、救いと永遠のいのちの三部からなり、初演は1742年4月13日のダブリン。ヘンデルは同時代のバッハと違い20代でイギリスに移住し、指揮から興行まで手掛ける今の総合音楽プロデューサーとして、王室音楽アカデミーを率いた▼脳卒中で倒れ、経済的にも苦境だった55歳での「メサイア」は、イタリア語ではなく英語で歌って大ヒットし、ヘンデル自身の「救世主」となる。当時、アイルランドにはイングランドに複雑な感情があり、「メサイア」に込められた反体制的メッセージが人々を熱狂させたという▼26歳の時、霊南坂教会で受洗した佐竹さんは毎年、立教大学メサイア演奏会に出演していた。生涯「メサイア」を愛し、ふるさとでの演奏を望んでいたという。

本紙定期購読のお申し込みは

■ご希望購読期間 ■氏名 ■郵便番号 ■住所 ■連絡先電話番号 ■メールアドレス（お持ちの場合）を明記の上、宗教新聞社宛、はがき、FAXまたはEメールで左記へお申し込みください。

宗教新聞社
〒一六〇―〇〇二二
東京都新宿区新宿5―13―2―4F
電話03（3353）2940
FAX03（5363）5182
e-mail:religion@sage.ocn.ne.jp
http://www.religion-news.net
※購読料 年間6000円（税・郵送料を含む）

縄文のパワーフィールドへ
神道よ！今こそ《古来の本物の道》に戻るのだ！
奈良泰秀
エハン・デラヴィ 著
本物のシャーマニズムを日本人が忘れている。神道の潜在力を思い出し、世界に伝えていこう。ケルト民族末裔の意識研究家が、神道のエッセンスを聞き出す。チャネラー、ヒーラー、コンタクティを超える、宇宙と直接つながる知恵は、ここ日本の神道にあり！
四六上製1785円(税込)
株式会社ヒカルランド
〒162-0821 東京都新宿区津久戸町 3-11
電話：03-6265-0852 FAX：03-6265-0853
http://www.hikaruland.co.jp

日本よ、蘇れ
日本神話の知恵
ゆがんだ歴史観、家庭の崩壊、教育の危機…。いま日本は大きな危機に瀕しています。この現状を打破するカギは、実は「日本神話＝古事記・神代」にあるのです。日本神話に満ちあふれる、愛と生命と知恵に立ち返ってこそ、日本の未来は拓けます。あなたも著者といっしょに、「神話の教え」をひもといてみませんか？
出雲井晶 著
●定価1000円（税込み）
●四六並製 232ページ
●発行・産経新聞社／発売・扶桑社
お問合せ先／扶桑社 販売企画部
〒105-8070 東京都港区海岸1-15-1
TEL03-5403-8859
購入申込み FAX:03-3578-3075

読みやすく、理解しやすく、真髄を極める達意の新訳
クルアーン
やさしい和訳
監訳著・水谷 周 訳補完・杉本恭一郎
2019年7月第3版発行、資料増補 大改訂 定価2700円＋税
国書刊行会
〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15
TEL：03-5970-7421

『先代旧事本紀』の神髄を極めた著者が語る。足で調べた大和建国の謎。
（定価：本体2000円＋税）
日本国始め 饒速日大神の東遷
大野七三 著
須佐之男尊の出雲国創建後、饒速日尊が32従者と25軍団を従え、九州から大和に東遷して纒向の地に大和国を建国。その時、饒速日尊が配下を募り配置した今も残るその出自と足跡を立証する。
批評社
〒113-0033 東京都文京区本郷1-28-36
鳳明ビル102A
TEL 03-3813-6344 Fax 03-3813-8990

自由社ブックレット2
理想の政教分離規定と憲法改正
四六判87頁／本体価格500円
杉原 誠四郎 著
憲法改正を見据えたとき、宗教に関する条項、規定は、真剣に考えねばならない問題である。
自由社
〒112-0005 東京都文京区水道2-6-3
Tel03-5981-9170 Fax03-5981-9171
http://www.jiyuusha.jp/

新刊！
人生の苦しみに積極的な意味はあるのか？
『21世紀に生きる日本人のための浄土思想』の出版を記念して、平成26年3月から28年11月までの5回にわたる講演をまとめた著者渾身の生命の書。
私の生命（いのち）の復活
上橋 泉 著
四六判296頁（本体1500円＋税）
日本人の宗教性（霊性）は回復するか？
株式会社 如月出版 販売部
〒152-0023 東京都目黒区八雲2-24-15
ラ リュミエール1F
TEL 03-6657-9000 Fax 03-6657-8999
http://www.kisaragibook.com

山喜房佛書林
神野富一著 A五判 五八〇頁 本体一六、〇〇〇円
補陀洛信仰の研究
チベット・アジア各地の補陀洛信仰とその伝播ルート等の集大成
福田亮成編 B六判 二九〇頁 本体五、八〇〇円
弘法大師聖句集成
本書は大師の言葉が読者の心に直接届くよう工夫され、掲示伝道や寺報の種子に最適。
〒113-0033 東京都文京区本郷5-28-5
TEL：03-3811-5361 FAX：03-3815-5554

仏教の危機人生の危機に希望の矢を放つ…三部作
浄土真宗の智慧 釈尊から親鸞に学ぼう 定価1200円＋税
寺院経営がピンチ！ 坊さんの覚悟 定価1200円＋税
死に方の流儀 中村メイコさんと山折哲雄先生に訊く 定価1200円＋税
瑞田信弘（たまだ・のぶひろ）・著 浄土真宗本願寺派称讃寺住職
発行：アートヴィレッジ
〒663-8002 西宮市一里山町 5-8-502
TEL 050-3699-4954 FAX 050-3737-4954
URL：https://artvillage.thebase.in/